

# 学級内の友人関係が生徒の学習意欲に及ぼす影響 —友人の学習意欲の高さと、生徒の有能感に着目した検討—

石田 靖彦

学校教育講座 (心理学)

## Students' Social Comparison with Classmates and their Academic Motivation

Yasuhiko ISHIDA

Department of School Education (Psychology), Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

### 問題と目的

自分よりも優れた他者との社会的比較は、学習意欲を高める場合もあれば低める場合もある。その相手と自分を比較して「自分はダメだ」と思う場合もあれば、「自分も頑張ろう」と思う場合もあるだろう。同様に、自分より劣った他者との比較についても、学習意欲を高める場合と低める場合がある。このように、同じ友人との比較であっても、生徒の学習意欲に及ぼす影響は人それぞれ異なっている。では、このような違いをもたらす要因には、どのようなものが考えられるだろうか。

外山 (2006) は、比較する相手の成績が自分よりも上か下かという比較対象の要因と、生徒自身の学業コンピテンスの高さに着目し、これら2つの要因が生徒の学業成績に及ぼす影響について縦断的に検討した。その結果、学業成績の高い友人と比較している生徒のうち、学業コンピテンスの高い生徒は学業成績が向上したのに対し、学業コンピテンスの低い生徒は学業成績が向上しないことが明らかにされた。一方、学業成績の低い生徒と比較している生徒は、学業コンピテンスの高さにかかわらず、学業成績が低下することが示された。この結果は、生徒の学習意欲には、比較対象の要因 (自分よりも上か下か) と、生徒自身の学業コンピテンスという個人差要因が交互作用的に影響を及ぼすことを示している。

一方、石田 (2012) は、友人との関係の親密さと友人の学習意欲の高さに着目し、これら2つの要因が生徒の学習意欲に及ぼす影響について縦断的に検討した。その結果、生徒の学習意欲における友人からの影響は、彼らとの関係の親密さによって、まったく逆の影響を及ぼすことが明らかにされた。具体的には、友人との関係が親密である場合、友人からの影響は自他

の類似性を高める方向に作用し、学習意欲の高い友人を持つ生徒は学習意欲が高められるのに対し、それらが低い友人を持つ生徒は学習意欲が低下することが示された。一方、友人との関係が親密でない場合の友人からの影響は、自他の類似性を低める方向に作用し、学習意欲の高い友人を持つ生徒は学習意欲が低められるのに対し、学習意欲の低い友人を持つ生徒は学習意欲が高められることが示された。この結果は、生徒の学習意欲には、友人の学習意欲が高いか低いかという友人の特徴と、彼らとの関係がどの程度親密かという関係の親密さが、交互作用的に影響を及ぼすことを示している。

これらの要因以外にも、生徒の学習意欲に及ぼす要因にはさまざまなものが考えられる。

Tesser (1988) は、人は自己評価をできるだけ維持・高揚するように行動する、という「自己評価維持モデル (Self-Evaluation Maintenance Model)」を提唱している。このモデルでは、自己評価は、①自他の相対的な遂行度、②相手との心理的距離、③課題の自己関与度、という3つの要因に左右されると仮定されている。この3つの要因のうち、自他の相対的な遂行度は、外山 (2006) での比較対象 (自分よりも上か下か) に相当し、相手との心理的距離は、石田 (2012) での関係の親密さに相当すると考えられる。一方、課題の自己関与度は、その課題領域が自己定義にどの程度関与しているかというもので、学習面に関して言えば、その科目が自分にとってどの程度重要かである。自己評価維持モデルでは、課題の関与度の高低によって、友人からの影響が異なると考えられており、自分にとって重要な科目で相手が自分よりも優れていることは自己評価を低下させるが、重要でない科目で相手が優れていることは、逆に自己評価を向上させると考えられている。

ただし、社会的比較が学習意欲に及ぼす影響を検討した研究の多くは、ある課題を実施してその結果を他者と比較させるという実験室実験や、現実場面での社会的比較を扱った研究でも、比較対象の優劣や比較対象との関係のあり方が学習意欲や学業達成に及ぼす影響を検討したもので、友人との比較を彼ら自身がどのように感じ、そして学習意欲が上昇あるいは低下したのかを、調査対象者自身に尋ねた研究は少ない。たとえば、自己評価維持モデルでは、重要な科目で他者より劣っていることは自己評価を低下させ、学習意欲を低下させると予測されるが、むしろ、重要な科目であるからこそ、もっと頑張ろうと思うこともあるだろう。またそう感じるかどうかは、生徒の有能感の高さなども関連していると考えられる。

本研究では、石田（2012）の研究を踏まえ、学習意欲に及ぼす友人からの影響を「友人の学習意欲が高い→自分の学習意欲が高まった」、「友人の学習意欲が高い→自分の学習意欲が低下した」、「友人の学習意欲が低い→自分の学習意欲が高まった」、「友人の学習意欲が低い→自分の学習意欲が低下した」という4つのケースに分類し、それぞれのケースをどの程度経験しているのかを検討するとともに、そのような影響を受けた理由を探索的に検討する。以上が本研究の第1の目的である。

本研究の第2の目的は、学習意欲における友人からの影響の違いについて、(仮想的)有能感という観点から検討することである。仮想的有能感とは、「自己の直接的なポジティブな経験に関係なく、他者の能力を批判的に評価・軽視する傾向に付随して習慣的に生じる有能さの感覚」と定義される(速水・木野・高木, 2004)。学業コンピテンスが、学習面での自己評価を表す概念であるのに対し、仮想的有能感は学習面に限らない自己の全般的な有能感であることが異なっている。また、いわゆる有能感と仮想的有能感の相違については、前者が成功体験や他者からの評価を通じて形成される感覚であるのに対し、後者は自分の体験とは無関係に、他者を低く評価することによって間接的に得られる感覚である点が異なるとされている(速水, 2012)。有能感は誰にとっても重要な感覚であるが、人から評価されたり何かを成し遂げたりといった成功経験を持たない人は、本当の有能感を得られないために、他者を軽視し自分の相対的な地位を上げることによって「仮想的」な有能感を持つという。

仮想的有能感の測定については、本来の有能感を反映するものとして自尊感情の度合いを測定し、他者軽視の度合いを測定する尺度との組み合わせによって有能感の4つのタイプに分類することが試みられている(Figure 1)。この中で、自尊感情が低く他者軽視が高い「仮想型」が速水らのいう仮想的有能感の典型であると考えられる。

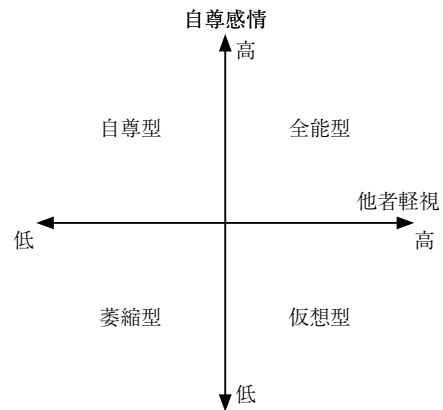


Figure 1 有能感の4タイプ (速水, 2012)

このような有能感のあり方は、学習意欲や学習活動、学業成績などにも影響すると考えられる。

速水・小平（2006）は、高校生を対象として、彼らの学習観や動機づけが有能感のタイプによってどのように異なるのかを検討した。その結果、他者軽視の強い人は、学習時間を増やしたりコツコツ努力して勉強することをあまり効果的に捉えていないことが示された。動機づけに関しては、自尊型は他者との比較にとられず、課題そのものに重要性を感じて学習しており、自律的な動機づけがもっとも高いこと、全能型は自尊型に近く自律的な動機づけが高いこと、仮想型は動機づけが比較的高いものの教師や親に強制されているという感覚が強く、他律的な動機づけが高い傾向にあること、萎縮型は全般的に学習に対する動機づけが低く、他律的な動機づけにとどまっていること、などが示された。

伊田(2007)は、仮想的有能感(自尊感情、他者軽視)と2つの達成動機(自己充足的達成動機と競争的達成動機)との関連について検討した。その結果、自己充足的達成動機は仮想型がもっとも低く、競争的達成動機は全能型が萎縮型と自尊型よりも有意に高く、仮想型はその中間に位置することが示された。また、自尊感情は2つの達成動機のいずれとも弱い正の相関が認められるのに対し(自己充足 $r=.29$ ;競争的 $r=.22$ )、他者軽視は競争的達成動機とは中程度の正の相関 $r=.42$ であるが、自己充足的達成動機とは無相関であった $r=.06$ 。この結果について伊田(2008)は、「仮想型は自分なりの基準での達成にも全力を尽くせず、(競争に固執しているにもかかわらず)競争的文脈でも他者に勝てず、そして競争から降りる(回避する)という選択をすることもできず、苦しい状況に置かれている」と考察している。このような有能感の違いは、優れた他者との比較や劣った他者との比較においても影響を及ぼすと考えられる。

そこで本研究では、他者との社会的比較が学習意欲に及ぼす影響の違いについて、(仮想的)有能感の個人差という観点から検討する。具体的には、調査対象者

の有能感を、自尊感情の高低と他者軽視の高低の組み合わせによって「全能型」「自尊型」「仮想型」「萎縮型」に分類し (Figure 1)、有能感のタイプによって、友人からの影響 (下記、ケース①から④) の経験頻度が異なるかどうか、また影響を受けた理由が異なるかどうかを明らかにする。

## 方 法

調査対象：国立大学に所属する大学生1年生192名 (男=101, 女=91)。調査は2012年6月に集団場面で実施した。

### 調査内容

#### 1. 生徒の有能感の測定

**自尊感情尺度**：Rosenberg (1965) で作成された自尊感情尺度の邦訳版 (山本・松井・山成, 1982) の10項目を使用した。回答は「あてはまる〈5〉」から「あてはまらない〈1〉」の5段階で評定させた。

**他者軽視尺度**：Hayamizu, Kino, & Takagi (2004) で作成された仮想的有能感尺度 (version 2) の11項目を使用した。この尺度の高低と自尊感情の高低の組み合わせによって、調査対象者の有能感を4つの類型に分類される (速水, 2012)。尺度の名称は仮想的有能感となっているが、有能感の類型である「仮想型」との混同を避けるため、速水・小平 (2006) や小平・小塩・速水 (2007) に従って、本研究ではこの尺度を「他者軽視尺度」と呼ぶことにする。回答は「よく思う〈5〉」から「全く思わない〈1〉」の5段階で評定させた。

**2. 友人からの影響経験**：石田 (2012) の結果を踏まえ、友人からの影響に関して、以下の4つのケースを設定した。

ケース① (友人意欲高→意欲上昇)：友人の学習意欲が高いから自分の意欲も上がった。

ケース② (友人意欲高→意欲低下)：友人の学習意欲が高いから逆に自分の意欲は下がった。

ケース③ (友人意欲低→意欲上昇)：友人の学習意欲が低いから逆に自分の意欲は上がった。

ケース④ (友人意欲低→意欲低下)：友人の学習意欲が低いから自分の意欲も下がった。

回答は、中学校・高校での経験頻度を「よくあった〈4〉」「ときどきあった〈3〉」「たまにあった〈2〉」「全くなかった〈1〉」の4段階で評定させた。

**3. 友人からの影響を受けた理由**：予備調査で得られた自由記述を参考にして、友人から影響を受けた理由として、「科目の特徴」「級友との関係」「教師との関係」「学級雰囲気」の4つのカテゴリーを設定し、カテゴリーごとに複数の項目を作成した。具体的な項目は以下のとおりである。

**科目の特徴**：その科目が重要だったから、その科目が重要でなかったから、その科目が好きだったから、そ

の科目が嫌いだったから、その科目が得意だったから、その科目が得意でなかったから、の6項目。

**級友との関係**：そのクラスメイトと仲が良かったから、そのクラスメイトとの仲が良くなかったから、そのクラスメイトが好きだったから、そのクラスメイトが嫌いだったから、そのクラスメイトに負けたくないから、そのクラスメイトに負けても気にならなかったから、の6項目。

**教師との関係**：先生を信頼していたから、先生を信頼していなかったから、先生が好きだったから、先生が嫌いだったから、の4項目。

**学級雰囲気**：クラス全体としてまとまっていたから、クラス全体としてまとまらなかった (バラバラだった) から、クラスに競争的な雰囲気があったから、クラスに競争的な雰囲気がなかったから、の4項目。

回答は、すべての項目について、「あてはまる〈5〉」から「あてはまらない〈1〉」の5段階で評定させた。

## 結果と考察

### 1. 友人からの影響の経験頻度

友人からの影響に関する4つのケースのそれぞれについて、「よくあった」「ときどきあった」と回答した人数を算出した。その結果、ケース① (友人意欲高→意欲上昇) では168名 (87.5%)、ケース② (友人意欲高→意欲低下) では34名 (17.7%)、ケース③ (友人意欲低→意欲上昇) では100名 (52.1%)、ケース④では113名 (58.9%) が、「よくあった」「ときどきあった」と回答していることが示された。

「友人の意欲が高い→意欲が上がった」「友人の意欲が低い→意欲が下がった」といように、自他の類似性を高める方向への影響は過半数の生徒が体験しており、なかでも「友人意欲高→意欲上昇」は、9割近い生徒が体験していた。一方、「友人の意欲が高い→意欲が下がった」は18%であったの対し、「友人の意欲が低い→意欲が上がった」という経験をしている生徒が過半数を以上いることが明らかとなった。学習意欲における友人からの影響は、単に友人の影響を受けて学習意欲が上昇したり低下したりするだけでなく、自己評価維持などの複雑な心的過程が介在しており、学習意欲の高い友人を持つことで学習意欲が低下したり、学習意欲の低い友人を持つことで逆に学習意欲が上昇したりすることが示唆される。

### 2. 友人からの影響の理由

次に、それぞれのケースにおいて影響を受けた理由を分析した。本研究では、それぞれのケースの経験頻度を4段階で評定させた後、その理由を複数の項目を用いて5段階で評定させたため、調査対象者によっては影響を受けなかった理由を回答している可能性が

あった。そのため、それぞれのケースにおいて「よくあった」「ときどきあった」と回答した調査対象者のみを分析の対象とした。

Table 1からTable 4は、それぞれのケースにおける理由を、「あてはまる」程度（5段階評定）の高い順番に、その平均値と標準偏差とともに示したものである。

ケース①（友人意欲高→意欲上昇）では、「そのクラスメイトとの仲がよかったから」「そのクラスメイトに負けたくなかったから」「そのクラスメイトが好きだったから」「その科目が重要だったから」「クラス全体としてまとまっていたから」「その科目が好きだったから」が評定中央値（3点）以上であった。

クラスメイトとの関係に関する理由が、科目の重要度や科目の好み以上に高い値を示しており、クラスメイトとの関係が友人からの影響を左右する大きな要因であることが分かる。クラスメイトとの関係が良かったり、負けたくないと感じるとともに、その科目が重要で好きである場合には、学習意欲の高い友人を持つことによって、自身の学習意欲も高められると言えるだろう。

ケース②（友人意欲高→意欲低下）では、「その科目が得意でなかったから」「そのクラスメイトに負けても気にならなかったから」「その科目が嫌いだったから」が評定中央値以上であった。「友人意欲高→意欲上昇」では、クラスメイトとの関係や、科目の重要さ、科目の好みが理由として挙げられていたが、この結果から、クラスメイトに負けたいと思わなかったり、科目が重要でない場合には、友人の意欲の高さは逆に自身の意欲を低下させると考えられる。

Table 1 ケース①（友人意欲高→意欲上昇）における理由

ケース①：友人意欲高→意欲上昇 (n=168)	平均値	標準偏差
7 そのクラスメイトと仲が良かったから	3.52	0.70
11 そのクラスメイトに負けたくなかったから	3.48	0.74
9 そのクラスメイトが好きだったから	3.29	0.88
1 その科目が重要だったから	3.28	0.77
13 クラス全体としてまとまっていたから	3.12	0.93
3 その科目が好きだったから	3.07	0.83
17 先生を信頼していたから	2.99	0.97
5 その科目が得意だったから	2.98	0.94
19 先生が好きだったから	2.93	0.95
15 クラスに競争的な雰囲気があったから	2.85	0.93
6 その科目が得意でなかったから	2.16	0.93
4 その科目が嫌いだったから	1.92	0.80
16 クラスに競争的な雰囲気がなかったから	1.78	0.79
18 先生を信頼していなかったから	1.65	0.82
20 先生が嫌いだったから	1.64	0.73
8 そのクラスメイトと仲が良くなかったから	1.63	0.80
10 そのクラスメイトが嫌いだったから	1.61	0.78
14 クラスのまとまりがなかった（バラバラだった）から	1.60	0.72
12 そのクラスメイトに負けても気にならなかったから	1.54	0.70
2 その科目が重要でなかったから	1.45	0.55

ケース③（友人意欲低→意欲上昇）では、「そのクラスメイトに負けたくなかったから」「その科目が重要であったから」「その科目が好きだったから」「その科目が得意だったから」が評定中央値以上であった。クラスメイトに負けたくないと感じたり、その科目が重要で好きな科目である場合は、友人の意欲が低くても自身の学習意欲は高められると考えられる。

ケース④（友人意欲低→意欲低下）では、「その科目が重要でなかったから」「そのクラスメイトとの仲が良かったから」「その科目が嫌いだったから」が評定中央

Table 2 ケース②（友人意欲高→意欲低下）における理由

ケース②：友人意欲高→意欲低下 (n=34)	平均値	標準偏差
6 その科目が得意でなかったから	3.15	0.89
12 そのクラスメイトに負けても気にならなかったから	3.15	0.99
4 その科目が嫌いだったから	3.03	0.90
2 その科目が重要でなかったから	2.47	1.11
16 クラスに競争的な雰囲気がなかったから	2.38	1.04
15 クラスに競争的な雰囲気があったから	2.24	0.92
8 そのクラスメイトと仲が良くなかったから	2.21	0.95
14 クラスのまとまりがなかった（バラバラだった）から	2.21	0.95
18 先生を信頼していなかったから	2.18	1.06
9 そのクラスメイトが好きだったから	2.12	0.95
10 そのクラスメイトが嫌いだったから	2.09	0.87
7 そのクラスメイトと仲が良かったから	2.09	0.93
20 先生が嫌いだったから	2.06	1.01
13 クラス全体としてまとまっていたから	2.03	0.87
1 その科目が重要だったから	1.88	0.95
17 先生を信頼していたから	1.85	0.86
5 その科目が得意だったから	1.76	0.89
19 先生が好きだったから	1.71	0.68
3 その科目が好きだったから	1.62	0.78
11 そのクラスメイトに負けたくなかったから	1.50	0.66

Table 3 ケース③（友人意欲低→意欲上昇）における理由

ケース③：友人意欲低→意欲上昇 (n=100)	平均値	標準偏差
11 そのクラスメイトに負けたくなかったから	3.39	0.84
1 その科目が重要だったから	3.34	0.82
3 その科目が好きだったから	3.26	0.81
5 その科目が得意だったから	3.17	0.89
19 先生が好きだったから	2.63	0.98
17 先生を信頼していたから	2.63	1.04
16 クラスに競争的な雰囲気がなかったから	2.43	1.05
7 そのクラスメイトと仲が良かったから	2.39	0.99
8 そのクラスメイトと仲が良くなかったから	2.31	1.06
14 クラスのまとまりがなかった（バラバラだった）から	2.28	0.95
9 そのクラスメイトが好きだったから	2.26	0.87
10 そのクラスメイトが嫌いだったから	2.14	0.98
13 クラス全体としてまとまっていたから	2.06	0.81
15 クラスに競争的な雰囲気があったから	1.93	0.82
6 その科目が得意でなかったから	1.84	0.85
4 その科目が嫌いだったから	1.72	0.73
18 先生を信頼していなかったから	1.66	0.70
20 先生が嫌いだったから	1.64	0.64
12 そのクラスメイトに負けても気にならなかったから	1.55	0.76
2 その科目が重要でなかったから	1.55	0.76

値以上であった。クラスメイトとの仲が良く、その科目が重要でなく嫌いな場合は、その友人に引きずられて自身の学習意欲も低下すると考えられる。

以上の結果をまとめたものがFigure 2である。

科目の特徴については、科目が重要かどうか、好きかどうか、得意かどうか、意欲の上昇や低下を左右していることが見て取れる。クラスメイトとの社会的比較にかかわらず、重要な科目や得意な科目では、意欲が高められやすいのに対し、重要でない科目や得意でない科目では意欲は低下しやすい傾向にあると言えるだろう。

一方、クラスメイトとの関係については、意欲の上昇や低下との関連がかなり複雑である。関係の親密さ(仲が良い、好き)については、親密な友人からの影響を受けて自他の意欲の類似性は高まる方向に作用すると考えられるが、関係が競争的かどうか(負けたくない、負けても構わない)については、意欲を上昇させる場合もあれば低下させる場合もあることが見て取れる。このことは、クラスメイトとの社会的比較が学習意欲に及ぼす影響は、親密かどうかと競争的かどうかということを区別して検討する必要があることを示唆している。生徒の学習意欲を高めるためには、クラスメイトと親密な関係だけでなく、負けたくないという競争的な意識の双方を高める必要があると言えよう。

Table 4 ケース④(友人意欲低→意欲低下)における理由

ケース④：友人意欲低→意欲低下 (n=113)	平均値	標準偏差
2 その科目が重要でなかったから	3.24	0.93
7 そのクラスメイトと仲良かったから	3.22	0.85
4 その科目が嫌いだったから	3.03	0.99
16 クラスに競争的な雰囲気がなかったから	2.96	1.02
9 そのクラスメイトが好きだったから	2.96	0.81
12 そのクラスメイトに負けても気にならなかったから	2.91	1.06
6 その科目が得意でなかったから	2.88	1.02
13 クラス全体としてまとまっていたから	2.48	1.01
20 先生が嫌いだったから	2.45	0.99
18 先生を信頼していなかったから	2.35	1.02
14 クラスのまとまりがなかった(バラバラだった)から	1.97	0.95
17 先生を信頼していたから	1.88	0.86
19 先生が好きだったから	1.86	0.83
5 その科目が得意だったから	1.71	0.77
11 そのクラスメイトに負けなくなかったから	1.62	0.80
1 その科目が重要だったから	1.61	0.72
3 その科目が好きだったから	1.61	0.68
10 そのクラスメイトが嫌いだったから	1.56	0.61
15 クラスに競争的な雰囲気があったから	1.54	0.60
8 そのクラスメイトと仲が良くなかったから	1.53	0.70

2. 有能感のタイプ別にみた友人からの影響

自尊感情と他者軽視の平均値に基づいて調査対象者をそれぞれ低高群に分割し、その組み合わせによって「萎縮型(自尊感情低・他者軽視低)」、「仮想型(自尊感情低・他者軽視高)」、「自尊型(自尊感情高・他者軽視低)」、「全能型(自尊感情高・他者軽視高)」に分類した。なお、自尊感情の平均値はM=29.5 (SD=6.3)、他者軽視の平均値はM=29.0 (SD=6.2)で、それぞれ的人数は、萎縮型でn=46、仮想型でn=51、自尊型でn=47、全能型でn=48であった。

有能感のタイプ別にみた友人からの影響の経験頻度

各ケースにおける友人からの影響経験頻度を有能感のタイプ別に算出した。Table 5は、友人からの影響における4つのケースの経験頻度を有能感のタイプ別に示したもので、Figure 3は有能感の違いを明確にするために、友人からの影響頻度を標準得点に変換した上で、有能感のタイプ別の平均値を算出したものである。

Figure 3から、「萎縮型」は友人の学習意欲が高い場合も低い場合も学習意欲が低下する経験が相対的に多

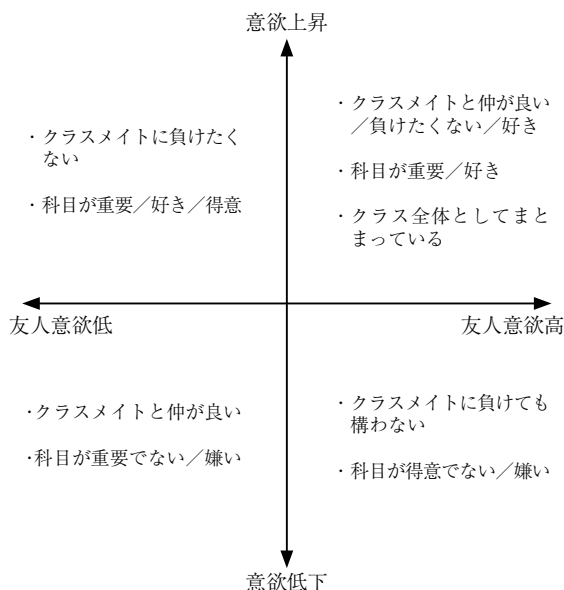


Figure 2 友人からの影響における理由の違い

Table 5 有能感のタイプ別に見た、友人からの影響の経験頻度(素点)

	萎縮型	仮想型	自尊型	全能型
自尊感情	24.37 (3.70)	24.51 (3.53)	34.89 (4.09)	34.33 (3.45)
他者軽視	23.72 (3.45)	34.22 (3.52)	23.79 (3.80)	33.63 (3.61)
経験頻度				
ケース①：友人意欲高→意欲上昇	3.28 (0.83)	3.42 (0.70)	3.66 (0.64)	3.46 (0.71)
ケース②：友人意欲高→意欲低下	1.85 (0.89)	1.76 (0.99)	1.79 (0.86)	1.52 (0.80)
ケース③：友人意欲低→意欲上昇	2.15 (0.97)	2.55 (1.01)	2.49 (0.93)	2.60 (1.01)
ケース④：友人意欲低→意欲低下	2.83 (0.95)	2.69 (0.96)	2.51 (1.08)	2.60 (0.94)

括弧内は標準偏差

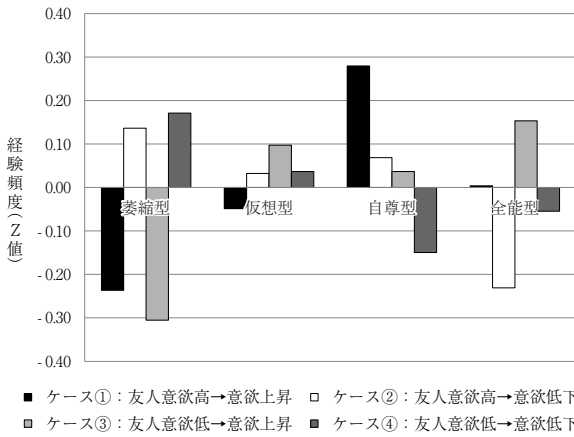


Figure 3 有能感のタイプ別に見た、友人からの影響の経験頻度 (Z値)

いこと、「自尊型」は友人の学習意欲が高い場合に学習意欲が高まる経験が相対的に多いこと、「全能型」は友人の学習意欲が高い場合に学習意欲が高まる経験が相対的に多いことが見て取れる。

ただし、それぞれの経験頻度について、自尊感情(高低)×他者軽視(高低)の分散分析を行ったところ、「友人意欲高→意欲低下」において他者軽視の主効果( $F(1, 188)=3.28, p<.10$ )が示されたのみで、有能感のタイプ間に明確な差は示されなかった。友人からの影響の頻度については、有能感の違いはそれほど大きくないのかも知れない。

有能感のタイプ別にみた影響を受けた理由

次に、有能感のタイプによって、友人からの影響における理由が異なるかどうかを検討した。友人からの影響の4ケースのそれぞれについて、その経験頻度が「よくあった」「ときどきあった」と回答した調査対象者を分析の対象とし、友人からの影響の理由の平均値を有能感のタイプ別に算出した。そして、それぞれの理由ごとに、自尊感情(高低)×他者軽視(高低)の2要因分散分析を行った。

Table 6は、友人からの影響に関する4つのケースにおいて、主効果、交互作用のいずれかが有意または有意傾向であった理由を示したものである。

「友人意欲高→意欲上昇」では、「その科目が好きだったから」という理由において、自尊感情と他者軽視の交互作用効果が示された( $F(1, 164)=7.30, p<.01$ )。単純主効果の検定の結果、自尊型は萎縮型と全能型にくらべて有意に高いことが示された(それぞれ $p<.05$ )。また「その科目が得意だったから」で交互作用効果が認められ( $F(1, 164)=6.01, p<.05$ )、単純主効果の検定の結果、自尊型は萎縮型にくらべて有意に高く( $p<.05$ )、全能型にくらべて高い傾向にあること、仮想型は萎縮型にくらべて高い傾向にあることが示された( $p<.10$ )。

「友人意欲高→意欲低下」では、「そのクラスメイトとの関係が良くなかったから」( $F(1, 30)=3.38, p<.10$ )

Table 6 有能感のタイプ間で違いが示された理由

	萎縮型	仮想型	自尊型	全能型
ケース①：友人意欲高→意欲上昇				
その科目が好きだったから	2.87	3.14	3.33	2.90
その科目が得意だったから	2.72	3.07	3.23	2.88
ケース②：友人意欲高→意欲低下				
そのクラスメイトと仲が良くなかったから	2.56	2.27	2.22	1.40
そのクラスメイトが嫌いだったから	2.67	2.18	1.78	1.40
ケース③：友人意欲低→意欲上昇				
その科目が好きだったから	2.93	3.19	3.40	3.38
その科目が得意だったから	2.80	3.00	3.40	3.34
クラスに競争的な雰囲気があったから	2.07	1.68	1.92	2.14
ケース④：友人意欲低→意欲低下				
その科目が嫌いだったから	3.13	1.48	1.60	1.79

と「そのクラスメイトが嫌いだったから」( $F(1, 30)=8.87, p<.01$ )で自尊感情の主効果が認められ、自尊感情の高い人(=全能型と自尊型)は自尊感情が低い人(=仮想型と萎縮型)にくらべてこれらの理由が低いことが示された。

「友人意欲低→意欲上昇」では、「その科目が得意だったから」( $F(1, 96)=6.77, p<.05$ )、「その科目が好きだったから」( $F(1, 96)=3.76, p<.10$ )で自尊感情の主効果が認められ、自尊感情の高い人(=全能型と自尊型)は低い人(=仮想型と萎縮型)にくらべて、これらの理由が高いことが示された。また「クラスに競争的な雰囲気があったから」で交互作用傾向が認められ( $F(1, 96)=3.24, p<.10$ )、全能型は仮想型にくらべてこの理由が低いことが示された。

「友人意欲低→意欲低下」では、「その科目が嫌いだったから」において自尊感情と他者軽視の交互作用傾向が示された( $F(1, 109)=2.80, p<.10$ )。ただし、単純主効果の検定ではいずれのタイプ間にも有意な差は示されなかった。

まとめと今後の課題

本研究では、友人からの影響に関する4つのケースについて、その経験頻度と影響を受けた理由について検討した。

友人からの影響については、ほとんどの生徒が学習意欲の高い友人を持つことで学習意欲が上昇したり、逆に学習意欲の低い友人を持つことで学習意欲が低下するということを経験していることが示された。中学や高校では、ほとんどの授業は教室を単位に行われており、クラスメイトの学習意欲や授業態度は、良くも悪くも影響を及ぼし合っていると考えられる。生徒の学習意欲を高めるためには、その生徒への直接的な働きかけでなく、彼らを取り巻く友人や仲間がどの程度

の意欲を持っているかという観点からも見ていく必要があると言える。

また本研究では、友人からの影響には、両者の類似性を高めるという方向だけでなく、意欲の高い友人を持つことで意欲が低下したり、意欲の低い友人を持つことで意欲が高められる場合のあることが確認された。同調や同一視といった類似性を高める方向への影響については、これまで多くの研究で指摘されているが、友人からの影響にはそれとは逆方向への影響も存在しており、そのような影響を経験している生徒が少なからず存在することが確認された。この結果は、学業達成の高い他者との比較によって、否定的な自己概念が形成されるという「井の中の蛙効果 (Marsh, 1987; 外山, 2008)」にも通じる結果であると言える。

では、学習意欲の高い友人を持つことで意欲が高められる場合と低められる場合とでは、何が異なるのであろうか。逆に、学習意欲の低い友人を持つことで意欲が高められる場合と低められる場合とでは、何が異なるのであろうか。

理由の分析結果からまず言えるのは、その科目が重要かどうか、好きかどうか、得意かどうかという違いである。友人の学習意欲に関わらず、重要な科目や得意な科目では、意欲が高められやすいのに対し、重要でない科目や得意でない科目では意欲は低下しやすいと考えられる。一方、クラスメイトとの関係については、クラスメイトとの関係が親密である場合には、自他の類似性を高める方向への影響を受けやすいことが示された。しかし、クラスメイトに負けたくないと感じるかどうかも、意欲の上昇や低下に影響しており、負けたくないと感じる生徒は、友人の学習意欲にかかわらず意欲を上昇させていることが示された。

ところで、科目を重要と感じるかどうか、好きかどうか、得意かどうかは、生徒の有能感の程度によって異なるだろうし、クラスメイトに負けたくないと感じるかどうかも、生徒の有能感によって違いがあるだろう。生徒の有能感の違いによる、友人からの影響の違いについては、全体的な傾向として、自尊感情の高い生徒 (= 自尊型と全能型) は低い生徒 (= 仮想型と萎縮型) に比べて、科目を好きであったり、得意であると回答する傾向が高く、クラスメイトとの関係を理由に挙げる傾向が低いことが示唆された。この結果から、自尊感情の低い生徒ほどクラスメイトとの社会的比較の影響を受けやすいことが示唆される。

いずれにせよ、友人との社会的比較が学習意欲に及ぼす影響には、生徒自身の有能感だけでなく、比較する相手の要因(学業成績において自分よりも上か下か、意欲が高いか低いかなど)、科目の特徴(重要か、好きか、得意か)、クラスメイトとの関係(仲が良いか、好きか、負けたくないか)など、さまざまな要因が複雑に関連していると考えられる。今後は、これらの要

因間の関係について詳細に検討していく必要がある。

## 引用文献

- 速水敏彦 (2012). 仮想的有能感の心理学: 他者を見下す若者を検証する 北大路書房
- 速水敏彦・小平英志 (2006). 仮想的有能感と学習観および動機づけとの関連 パーソナリティ研究, 14, 171-180.
- 速水敏彦・木野和代・高木邦子 (2004). 仮想的有能感の構成概念妥当性の検討 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), 51, 1-7.
- Hayamizu, T., Kino, K., Takagi, K., & Tan, E. H. (2004). Assumed-competence based on undervaluing others as a determination of emotions: Focusing on anger and sadness. *Asia Pacific Education Review*, 5, 127-135.
- 伊田勝憲 (2007). 仮想的有能感の規定因—“assumed-competence”は「見せかけの適格性」か— 日本教育心理学会第49回総会発表論文集, 341.
- 伊田勝憲 (2008). エリクソンの第IV段階「勤勉性」と第V段階「アイデンティティ」—児童期から青年期への移行と仮想的有能感— 心理科学, 28, 28-41.
- 石田靖彦 (2012). 中学校1年生の学習意欲と学業達成: 学級内の友人関係に着目した検討 日本教育心理学会第54回総会発表論文集, 824-825.
- 小平英志・小塩真司・速水敏彦 (2007). 仮想的有能感と日常の対人関係によって生起する感情経験—抑鬱感情と敵意感情のレベルと変動性に注目して パーソナリティ研究, 15, 217-227.
- Marsh, H. W. (1987). The big-fish-little-pond effect on academic self-concept. *Journal of Educational Psychology*, 79, 280-295.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton: Princeton University Press.
- Tesser, A. (1988). Toward a self-evaluation maintenance model of social behaviour. *Advances in Experimental Social Psychology*, 21, 181-227.
- 外山美樹 (2006). 中学生の学業成績の向上に関する研究: 比較他者の遂行と学業コンピテンス 教育心理学研究, 54, 55-62.
- 外山美樹 (2008). 教室場面における学業的自己概念: 井の中の蛙効果について 教育心理学研究, 56, 560-574.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.

(2013年9月30日受理)